

# 令和元年度ワカメ養殖概況

多田篤司

## 種苗生産～育苗

今年度も昨年度（H30）同様に、鳴門地区における種苗生産は、猛暑による培養水槽の水温上昇と、日照不足が相まって、水槽内で種苗が十分に育たない生育不良や育苗開始の遅れが多数報告された。さらに、小鳴門海峡に位置する水産研究課鳴門庁舎の汲み上げ海水温をみると、育苗期間中の海水温は平年値よりも高く推移しており（図1）、育苗中のワカメの生育も遅く、例年よりも約2週間種苗の流通が遅れた。

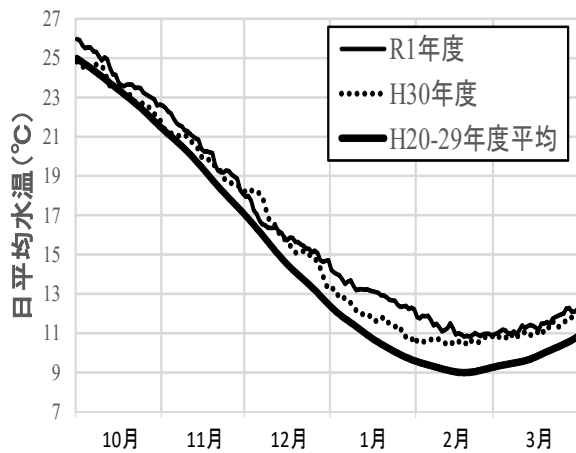


図1. 水産研究課鳴門庁舎の汲み上げ海水温

## 本養殖

### (1) 種苗の需給

前述のとおり種苗の生育不良により、早生系種苗を利用する生産者への供給が遅れ、本格的な本養殖開始が平年より1~2週間遅れた。しかし、結果的に種苗は各地で余剰が出る程生産されたため、種苗が不足することはなかった。

### (2) 食害

今年度は、直近10年で最も食害強度の高い年となった。10月下旬から4月下旬まで平年より海水温が高く推移したため、植食性魚類の活動が長期化したことが原因だと考えられる。食害被害は10月下旬から1月中旬まで続き、育苗中の種苗をはじめ、葉状部のみならず、茎にクロダイ類あるいはカワハギ類と思われる食痕も見られた（写真1）。食害により損失したワカメを補うため、各地で種苗の余剰を使って養殖を継続したが、収穫が遅れる大きな要因となった。



写真1. 茎に残った食痕（令和2年1月14日）

### (3) 付着物の状況

種苗への付着物については、昨年度は付着珪藻や浮泥（通称：ドマ）が非常に多く芽落ちが多発したが、今年度は目立った報告はなかった。

藻体への付着物については、鳴門地区を中心にヒドロ虫網が大量に付着した。漁期後半には藻体の半分以上を廃棄する必要があるほど付着し、製品歩留まりを大きく低下させた。

### (4) 色落ち

DIN濃度は12月中旬から平年値を下回る状態が続いた。2月下旬になると、ワカメの色落ちが始まる目安となる2 $\mu$ M/L未満となったが、実際に色落ちが発生したのは3月上旬頃となった。その後も低濃度で推移したため、収穫期後半は色調の劣った藻体が多く見られた。

### (5) 生長・品質及び生産量

高水温や深刻な食害被害等のため、養殖期間を通して生長が遅いという漁業者の声が多かった。最終的な収穫量は播磨灘沿岸で平年並み、紀伊水道以南ではやや減少したとみられる。

品質は3月中旬頃まで良好なワカメが多かったが、収穫期後半は付着物、色落ちの影響があり、品質は徐々に低下した。

### (6) ワカメ種苗の有償配布

平成30年度より、水産研究課が開発した高水温耐性株（鳴門養殖品種と椿町天然ワカメの交雑株）の有償配布を開始している。今年度は、県下9漁協から購入の要望があり、養殖業者全体の2割以上（50業者）が養殖に利用し、生長面についても良好で、おおむね好評であった。